

会話を楽しみ ボランティア活動

ほそかわ かおる
細川 馨さん

89歳の現在も現役でボランティア活動を行っている、町内ボランティア登録最高齢の細川馨さんにお話を聞きました。



恩返しの気持ちで

砂利屋の仕事^をを父からついで、町内で長い間仕事一筋に生きてきたのですが、67、68歳で仕事をリタイアしました。これまで朝から晩まで仕事をしていたので、仕事を辞めると何もすることがなく、手持ちぶさたな日々を送っていました。ある時、町の広報誌を見て「ボランティア募集」の記事が目にとまりました。働いていた時を振り返ってみると、いろいろな方とお会いしお世話になってきたけれど、自分自身は地域に何もしてこれなかったのではと思いました。自分にながでできるかわからないけれど、少しでも世間に貢献できないかと思ってボランティアに応募・登録しました。

楽しみながら20年

当時登録されたのが30～40人くらいだったと思います。今はボランティアの養成講座とか講習などがありますが、そのときはそういったものはなく、保健師さんや経験のある方がやることをサポートしたり、見よう見まねで実践したりといった

感じでボランティア経験を積むことしかできませんでしたから、結構大変な思いをしました。それでもボランティアの皆さんとお話をしながら、楽しくやれたので20年近くも続けられたのだと思います。平成13年から本町地域で高齢者の「閉じこもり防止事業」を行っている「友遊会」は、設立当初からスタッフとして携わっています。ボランティアスタッフと顔を合わせて話をするのが、自分にとってリフレッシュできる良い機会です。事業当日や事前の準備会でスタッフや会員の方と会うことを楽しみにしています。医療大学の工藤禎子先生は事業に参加してくれた時は必ずコメントを残してくれ、そのコメントをスタッフ全員で確認し合い次の活動に生かされたことも継続できた要因だと思います。



準備会で議長を務める細川さん

原点に戻っての活動を

物価の上昇とともに「友遊会」の事業もだんだんと経費がかかるようになりました。会を継続させるためにも、食事は「握り飯」、年1回の郊外活動は「歩く」という原点に戻って考える必要があると思っています。現在の「友遊会」スタッフの多くが20年くらいの経験を持つ方なので、新たなスタッフを受け入れられる体制を整え、新しいスタッフを迎え入れることで会の新陳代謝も考えなければならぬと思っています。10年ほどやってきた代表という立場は今回で降りりましたが、これからもスタッフと楽しみながらボランティア活動を続けていきたいと思っています。

学生時代は音楽大学で歌の勉強をしていた細川さん。「ボランティア活動の中では、歌を披露することもあるんですよ」と取材中にも自慢の歌声を聞かせてくれました。

(4月14日取材)